特集・宮崎汎会員が見た世界の旅第１部映画編第２２話

映画「モロッコ」外人部隊の白い服　　モロッコ

モロッコワインは自称通をもって任じるワイン好きが美味い！と言って頬を緩める。イスラムの国でありながらワインを仕込み、日本も多くはないが輸入しているので味わえる。モロッコは３世紀ごろ古代ローマ帝国の版図に組み込まれ、ワインやオリーブ油の製法をローマから伝授され今日に至っているのである。

モロッコは王国で１９５６年に独立した若い国である。ボランティアで社団法人日本モロッコ協会を手伝うようになって久しく、モロッコへはこれまで数回訪れ各地を見聞してきたが、実に観光資源の豊かな国で旅を重ねるごとにその都度新しい発見があり感動する。

ある時友人から映画「モロッコ」を知っているかと尋ねられた。この映画は１９３０年（昭和５年）にアメリカで製作され日本での公開は翌年の昭和６年である。かなり昔の映画であり見てはいないし、題名にも覚えはなかった。これは是非にと思いＤＶＤを購入して自宅でみた。吹き替えは日本人とは顔かたちの異なる外人さんが日本語をしゃべるので、とても奇異に感じどうもなじめないが、この映画はモノクロで字幕である。

名画「モロッコ」ＤＶＤ

映画のあらすじは、フランスの外人部隊の女好きな兵士役をゲーリー・クーパーが演じ、パリからここモロッコに流れてきた酒場の歌姫役をマレーネ・ディートリヒが演じている。酒場で出会い、二人は互いにひかれあう。兵士は上官の妻ともいい仲であったが歌姫に次第に愛を感じていく。だがここへやってくる船中で歌姫を知ったフランスの富豪が求婚していることを知って彼女の幸せを願い自分が退くべきと決めた。彼女が舞台へ行っている間に、彼女の部屋の大鏡に口紅を手に取り鮮やかな筆致で幸せを祈ると書き残し前線へ去っていくのである。

兵士が去り、富豪の男から求婚された歌姫は祝福する人達の席に着いた。その時軍楽隊の奏でる行進曲の音がかすかに聞こえてくる。歌姫は前線に送られた兵士が帰ってくると察知し席を立ち飛び出していく。

しかし彼の兵士の姿を見いだせず、行進している兵士に消息を問うと負傷して入院中と聞かされ、富豪の夫となる男に懇願し入院している兵士を見舞うため車で二人は前線のある病院へ向かう。

到着して病院内をくまなく探すもいない。ベッドに横たわっている患者に尋ねると彼の兵士の負傷は騙りで怪我はしてないことが判る。

外人部隊が去っていったサハラ砂漠

彼の兵士は偽りがばれ懲罰で砂漠を越えた前線へ再び送られることになった。軍楽隊の奏でる集合の合図の中、兵士は歌姫に強く惹かれながら淡々と別れていく。行進していく軍隊の後ろには、兵士等とひと時の逢瀬をもったモロッコ女性達が大きな荷物を担ぎ、一団となって行進する軍隊の後を追う。それを見た歌姫は婚約者に彼の兵士を自分も追いか

けると慌ただしく告げ、モロッコ女性の一団の後を追いかけながら履いていたハイヒールを脱ぎ捨て茫漠とした砂漠へ踏み出す。ラストシーンは砂丘に兵士たちも後を追う女性たちも陽炎のように消えていく。何ともせつない物語である。
この映画を何度も見るうちにいつの間にか哀愁に満ちたカスバの女の歌詞を連想するようになった。最後のフレーズにある「泣いて手を振る後ろ蔭、外人部隊の白い服」の下りはこの映画のラストシーンを見た人の作詞ではないかと思ったりしたものである。
映画を見ながら、およそ 100 年前のモロッコの姿を覗き見た思いがする。そしてわずか１００年の間にモロッコは近代化に向けて大きく飛躍したことを実感したのである。
余談ながらドイツ人の足のきれいな有名な女優が、自分の美脚に保険を掛けていると耳にしたことをぼんやり思い出した。其の女優こそが一世を風靡したマレーネ・ディとリッヒである。彼女の美しい脚は映画モロッコの中でも披露されている。

アトラス山脈を越える急峻な道路

現代のモロッコはアフリカ諸国の中でも抜きんでた経済発展を遂げている。海外投資を促進するため国内のインフラ整備、とりわけ道路や橋の整備は急ピッチで進めている。国を縦断するアトラス山脈越えは今も難路である。狭く険しい道で断崖から転落する事故も多く、この道の拡張や事故防止の工事が進行中である。この狭く険しい道路こそかつてのフランス軍が造成した軍用道路なのである。白い服を颯爽とまとう外人部隊がトラックに揺られながら急峻な道を越え、前線へ向かうことを想像すると何やら勇ましくも哀愁漂う古き良き時代のロマンを感じる。